

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## 寛容さと批判と

著者	御輿 哲也
雑誌名	神戸外大論叢
巻	68
号	1
ページ	15-16
発行年	2018-04-20
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1085/00002209/">http://id.nii.ac.jp/1085/00002209/</a>



## 寛容さと批判と

御輿 哲也

国学者の本居宣長は、弟子たちに向かって「わが説にななづみそ」と伝えたといいます。「な～そ」は古典文法でお馴染みの表現で、「～してはいけない」という禁止の意味、「なづむ」は「とらわれる」「こだわる」といったニュアンスの動詞です。従って、全体としては「私の唱える説に（それを正しいものと決めつけて）執着してはならない」といった意味合いになるのでしょう。

ごもつともな言葉ですが、ちょっと立派すぎるような気がします。そもそも弟子としては、ある程度は師の説く学説に従順に対応せざるをえないはずですし、一方教える側としても、自分の解釈や主張がたやすく乗り越えられたりすると、師として身のおき所がないのでは、と心配になったりします。まあ宣長ほどの学者なら、「そう簡単に自説が覆されるわけがない」といった自恃の念があったのかもしれません。

ただ、そうは言いながらも僕自身、本学の教壇に長く立たせていただいている間に、学生の皆さんの発言に蒙をひらかれた思いがしたことは、一度や二度ではありません。それは当方のつまらない勘違いの指摘にはじまって、時には思いもよらぬ視点の存在を教えられることさえありました。特に第2部のゼミではかなり多くの社会人の皆さんが参加して下さっていて、いろいろな面で勉強になりました。職種も実に多様で、元高校教員の方や役所勤めの方、さらには元工場主、警察官、看護師の方までいらっしゃり、ちょっと他所では聞けないような話（ウラ話を含む）を様々な機会にうかがえたことは、僕にとって大切な財産になっています。「第2部廃止論」というのは、今もあちこちで怪しくくすぶっているらしいのですが、むしろ第2部には「大学とは何か」という、少しばかり大げさな問題を考えるヒントになるものがたくさん見つかるような気がします。

そもそも、多様な意見やユニークな発想を重んじること、あるいは少数者の考えにも敬意をはらい、十分な配慮をおこなうことは、大学に課せられた役割のなかでも最も基本的で重要なものであるはずです。そして我田引水だと言われるかもしれませんが、外国文学の研究・教育という営みのなかには、本質的

にそうした多様性や独創性の意味と深く関わるものがあると思います。たとえば、イギリスの作家の文章を日本人としてどのように読むべきか、または読みうるかについて、たった一つの答えしかないなどというのは考えられないことで、できることは皆がそれぞれの解釈を持ち寄り、比較検討をとおして自分なりの解釈をさらに掘り下げ深めて、説得力のあるものに高めていくことに他ならないはずです……。などとまあ僕が変に力んでも、あまり「説得力」はないでしょうから、ここは一つ本物の作家の毅然とした言葉の力を借りてみようと思います。

20世紀イギリスの小説家 E.M.フォースターは『インドへの道』などの作品で知られていますが、政治問題や社会問題をも射程におさめた数多くのエッセイの筆者としても著名な存在です。なかでも「寛容の精神」と題するエッセイには、彼の人生観のエッセンスが盛り込まれているように思えます——「[大事なものは] いばらず、怒らず、苛立たず、怨みを抱かぬこと。積極的、戦闘的な理想はもはや信じられません(略)。寛容精神は(略) 冴えない美德ではあります。しかし、これには想像力がぜったい必要なのです。たえず他人の立場に立ってみななければならないのですから」(小野寺健訳) 想像力を擁護してはいるものの、これではいかにも微温湯的な主張に聞こえるかもしれません。けれども、こうした一見温和な主張の背後には、それを支える強靱な批判精神があったはずで、そうであればこそ、一方では「イギリス人は体力は発達し、知力もまずまずだが、情緒的な発達は皆無だ」といった歯に衣きせぬ痛烈な皮肉が語られることにもなるのに違いありません。

単に曖昧に受け入れるのでなく、単に一方的に非難を浴びせるのでもない——要は寛容精神と批判精神をどのようにバランスよく共存させるかなのでしょうが、これを実現するのはなかなか難しいことだと思います。自分自身を振り返ってみても、ひとりの教師として首尾よく実践できたと思えたことはほとんどありません。ただ社会全体としても、これだけ苛烈をきわめる競争社会ゆえ、批判精神はかなり発達しているのに、寛容精神の方はひどくなおざりにされたままだと感じるのですが、皆さんはどう思われるでしょうか？

最後になりましたが、退職にあたり同僚の先生方や院生・卒業生の皆さんが、大部の記念論文集『言葉という謎』(大阪教育図書)を贈呈して下さいたことに、あらためてお礼を申します。何人かの友人から「お前は幸せ者だぞ」と言われましたが、本当にそう思います。現在やや不安定な状態の体調が許すなら、何とかあと1冊ほど研究書を上梓することで、なけなしのご恩返しができればと念じているところです。